大津百町瓦版

夏　季　号［No．３７］
２０１８年　　７月

発行　大津の町家を考える会
大津市中央１丁目８－１３
TEL・FAX　077-527-3636
Email：otsu.machiya@gmail.com

大 津 ・ 町 家 ・ まちなか ・ いろいろ情報

銅板で制作された見事な膳所城、生涯学習センターのロビーに置かれていて何時でも見ることができます。　制作は 山 極 千 三 氏

膳所と大津百町

近江大橋の西岸、湖上にせり出したかのような小さな森には、一五〇年前まで本多家六万石の膳所城が琵琶湖に白い影を映していました。四層の天守と十を超える櫓は、あたかも白い帯のように広がっていたといいます。

膳所城は一六〇〇年関ヶ原の戦いの後、天下人となった徳川家康が諸国の大名に命じて最初に作らせた天下普請のお城です。

膳所にお城が築かれたのは、関ヶ原の戦いに大きな影響を与えたという大津城攻防戦のあと、京の都や瀬田橋の警護と同時に、来るべき大阪の陣に備えるためには、琵琶湖や瀬田川、街道を扼した膳所が最適地であったからです。

現在では本丸跡は大津市の公園として市民の憩いの場になっていますが、昭和二六年までは風致地区に指定された民有地でした。住宅開発などされずに残されたのは幸運といってもよいほどです。堀も湖岸道路や公営住宅の整備に伴い埋め立てられましたから、膳所城をしのばせるものは膳所神社の表門などごくわずかです。しかし、城下町の特徴である狭隘で屈曲した道路のおかげで町割りは元禄時代とほとんど変わりません。いまでも古図を片手にかつての膳所の街を散策できるのは膳所の魅力の一つになっています。

大津百町は一万人を超える人口の町でしたが、大津代官所にはわずか六〇人ほどの武士や手代しかいませんでした。それに対して膳所は三千人ほどの住民のうち、七百人は侍や足軽たちでした。つまり大津百町が町人の町なら膳所は武士の町ということになります。お互いになぜこんな極端な街づくりをしていたのでしょう。それは二つの町が互いに支えあうことで近世封建都市を形成していたからにほかなりません。大津百町の繁栄は膳所の武備に支えられていました。それは大津百町が繁栄に向かってはばたく鶴であるなら、膳所は二六〇年間自分の役割を守り通した亀のようであったとも言えます。

［膳所まちづくり委員会副会長　　寺 田　智 次］

蘆花浅水荘

膳所の湖岸道路沿いの金網越に見えるのが「蘆花浅水荘（ろかせんすいそう）」という別荘です。京都画壇の日本画家で国内外に知られた膳所出身の画家「山元春挙」が自ら設計・監修し大正期に建てたものです。

「山元春挙」は、明治から昭和初期にかけて京都画壇で活躍し、国内外にその名を広く知られた日本画家です。

この山元春挙は膳所に生まれ、１２歳で野村文挙という画家に絵を学んだのち、二十歳で竹内栖鳳らとともに京都青年絵画共進会を再興しました。その後、京都市美術工芸学校教授となって、農商務省や京都府により明治３７年渡米を命じられて西欧絵画についても勉強をしました。

そして大正３年、生まれ故郷である大津の湖畔膳所に土地を収得して、別荘「蘆花浅水荘」の造営に着手しました。この別荘は春挙が自ら設計監修した見事な建物で大正１０年に一応の完成をみましたが、その後もいろいろ手を加えています。

【 蘆花浅水荘玄関入口 】

しかも春挙は後に膳所町制施行３０年（昭和６年）の記念誌の中でこう語っています。「…斯うした思い出の深い土地だから此処に別荘を造ったのでこれも長く私有物として子孫に譲るという考えはない。財団法人組織にでもして美術工芸その他の人々の集会場に開放し、充分利用してもらいたいと希望している…」と記していました。

山元春挙がフランス政府に作品を寄贈したことにより、此処には当時の(注１)フランス大使ポール・クローデルが訪れており、その後にフランス政府から名誉あるレジョンドヌール勲章が山元春挙に贈られました。

【 お庭に建つ持仏堂 】

この「蘆花浅水荘」は山元春挙が設計・監修した見事な近代建築であることから、平成６年に国の重要文化財に指定されました。

此処では知る人ぞ知る建物として、過去にも色々な催しに利用されてはきましたがまだまだ知られていません。膳所・大津という由緒ある町に郷土の巨匠がのこした貴重な文化遺産を守り続けるには、さらなる積極的な活用と運営をしていくために、いま新たな活動が取組まれています。

【 お庭からの蘆花浅水荘 】

春挙忌

7月12日(木)～7月14日(土)

今回は巨匠山元春挙の命日７月１２日に取組まれる一連の行事が広く一般に公開されます。

特に滋賀県立近代美術館の協力を得て、画伯の作品を展示し見ることができます。山元春挙の偉業に触れ１００年前の日本文化に想いを馳せられる絶好の機会になるものです。

〇持仏堂開帳　（一般公開）
〇邸内拝観　（庭園一般開放）
〇春挙作品展示（２階アトリエ）
〇作品鑑賞会１４日(土)午後１：００より（美術館学芸員による作品解説と画伯ゆかりの人達による春挙談義　要申込み：先着３０名）
　　拝観料５００円(庭園散策含む)
　　鑑賞会５００円(別途)

申込み問合せ 077-533-1941　企画舎　羅針盤

(注１)ポール・クローデルはロダンの弟子であった、女性彫刻家カミュ・クローデルの弟で中国大使も務めていた。

古来より大津は 鶴の里、鶴の浦、とも呼ばれていた

この『大津百町瓦版』は２０１２年の１５号から季刊で年四回発行してきました(但し百町館改修工事で１回、編集都合で１回休刊)。町の読者の方や会員から以前に掲載されたもので、面白そうな記事はまた載せてもいいのでは？とお話もありました。そんなこともあって今号では５年前の２０１３年新年号Ｎｏ．１７号から「古来より大津は鶴の里、鶴の浦とも呼ばれていた」を再録しました。

ご存知の方も多いこととは思いますが、大津百町内にある商店には商品名や屋号に「鶴」を名につけたお店や商品があります。

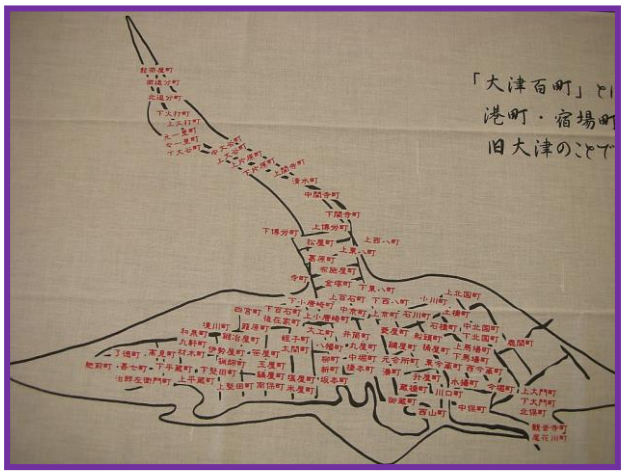
丸屋町商店街の電車道から入ったすぐ右側にお酒などを販売されているお店『畑中商店』があります。もとは味噌・醤油の製造販売をされていたお店であったそうですが、ここのお店の大きなショーウインド内側に、その場に収まりきらないくらいの立派な木製の看板が飾られています。

【 立派な「鶴里味噌」の看板 】

その看板には鶴が羽を広げた彫り物と商品名の「鶴里味噌」という文字が大きく浮彫されています。

さらに、旧東海道の分岐点札の辻から東に入る京町沿いにも「鶴」の付く『鶴里堂』という、三井寺御用達の生和菓子を扱うお店があります。おじゃましてご主人に「鶴里」の由来をお聞きしました。

いろいろお話を聞くと、それは比叡山から見た大津の町が浜大津から鶴が羽を広げ、細く追分へ首が伸び



【 町家を考える会が作成・販売している百町手拭い 】

ているような形であることから、何時の頃からか誰が名付けたか定かではありませんが、かなり古くから「鶴の里」「鶴の浦」「鶴里」とか町の人々が呼んでいたようです。

そうしたところから、この大津の中心地にあった学校（旧逢坂小学校）が明治時代の初期は「鶴里学校」と呼ばれていたようです。そして『鶴里堂』のご先祖はその「鶴里学校」の「鶴里」からお店の名前をつけたと聞いているとお話くださいました。

【 大正時代の書家「竟山」書の扁額 】

大津で最初に開発された高台の住宅地（ＢＢＣテレビ放送局がある）の住宅地が「鶴の里」と名付けてあるのも、場所はだいぶ違いますがこの大津のイメージから名付けられたのかも知れません。

ユネスコ「世界の記憶」登録記念展

京都高麗美術館で特別展　京・近江の朝鮮通信使

２０１７年１０月、日韓両国の「朝鮮通信使に関する記録」がユネスコの「世界の記憶」に登録されました。朝鮮通信使は慶長１２年(1607)から文化８年(1811)１２回に及んで、政治家・学者・医者・画家や歌舞音曲の名手なども随行しました。近江では徳川家康でしか通ることのない街道を唯一、通信使の通行が認められた「朝鮮人街道」が現存しています。そして街道沿いの守山、近江八幡、彦根で多くの日本人と文化交流し、その足跡が多く遺されています。

通信使はもちろん大津も通過、その様子は円山応挙の弟子である円山応震の「琵琶湖図」に石場港辺りを通過する通信使の列が描かれています。また「大津町覚」や「四宮例祭曳山永代伝記」のなかにも朝鮮通信使の通過に関することなどが書かれています。６月～８月２１日(火)まで、京都の高麗美術館で『京・近江の朝鮮通信使』展が開催中です。

大津を知る講座　萬　塾

毎年継続して企画している『萬塾』講座、今年は昨年も取り上げました「大津絵」の連続講座を実施しました。昨年は「大津絵の真贋」と題したお話でした。今年は第一回「大津絵を生んだ大津追分の地理的条件」第二回「地域限定絵画としての戦略」と題してのお話を大津市歴史博物館の横谷学芸員に聞きました。

第一回　６月１０日(日)

「大津絵を生んだ、大津追分の地理的条件」

横谷氏は、大谷～追分界隈の今は人家も少なく、ひっそりとしていますが江戸時代、東本願寺辺りで仏具関係の商いをしていた人々が移動させられ、瞬く間に四百軒近くもの人家が出来、一大街道商店街となったこと。

人と物流の交わる絶好の売り場

大谷～追分は大津の宿場の中心から離れ、琵琶湖も見えない所であったが、まぎれもなく天領の大津百町を構成する町で、難所でありながらそこは東海道と伏見街道の結節点で、当然ながら人も物流も渋滞する所でこれこそが大津絵を生んだ地理的条件であったとの説明がありました。

大動脈であったことは、大津～京の間では宝永３年、享保１９年、文化元年と幾度となく大改修工事が行われたことから分かるとのお話でした。

第二回　６月２４日(日)

「地域限定絵画としての戦略」

この日は横谷氏個人所有の大津絵、三幅を持って来られました。まず参加者はその絵を見せて頂きそれからのお話となりました。大津絵は一般的に仏画から始まったと言われており、十三仏が描かれている初期大津絵を映像で見せてもらいました。この一枚の仏画で初七日から三三回忌まで役立つものだったそうです。

大津絵は速く安く

大津絵はご当地ユルキャラであった。柿渋の油紙による型紙を置いて刷毛引きで色を素早くぬる。絵具は３色～７色高価な絵具は何倍にも薄めて使っており速く仕上げ、客は素早く出来上がるまでの様子を見ながら旅の休憩も兼ていたとのことでした。連続講座のおかげで大津絵の事がかなり理解できたと参加者の声がありました。

編集後記　夏季号３７号は表紙を、「膳所まちづくり委員会」の寺田さんにお願いして、さて中身の２ページに何をと考えていましたら、いま力を入れておられる「蘆花浅水荘」の建物紹介となり、１、２ページが膳所特集になりました。　［K．A］

気になるお店紹介

「喫茶・アンドモア」

大津市浜大津2丁目2-26

TEL 077-510-2951

営業日：火～土　時間：8:30～22:00

浜大津明日都から商店街の方に少し入った所に、喫茶店“アンドモア”があります。お店の前が駐車場になった奥にあって、お店の中はアットホームな空間になっています。この地域の活性化に寄与すればと、昨年７月に開店され、１年近くになります。

喫茶だけでなくモーニング、ランチ、呑み所でもあるのです。営業時間はなんと朝の八時半から夜の一〇時までです。

やっておられる松岡由恵さんは、七七歳、素敵な感じの女性です。元々は京町に育って、若いころにはギャラリーラウンジをやっておられた経験もあって、このお店を開かれたそうですが、営業時間も永くて、足も疲れて、大変とのことです。今、英語を習っているとのこと。いこいの場として利用してほしいとのことですので、一度お店の雰囲気と素敵な女性に会いに行ってください。